

説教 『十字架の勝利』 マタイによる福音書 20：20-28 2,017年4月2日

二人の弟子の抜け駆け。これがひともんちゃく起こしたというのが今日の話です。12人の弟子のうちゼベダイの子ヤコブとヨハネの兄弟が、母親の手引きで、右大臣、左大臣の地位を得ようとしていました。この話を聞き知った他の弟子たちは憤慨し、弟子たちの間に陰悪な雰囲気は漂うこととなったのです。抜け駆けも感心できませんが、地位をめぐる争いも残念なことで、どちらも同罪といえます。わたしたちも、人に先んじるのを良しとしますし、人をうらやみ面白くない気分になることもあります。人間の嗟嘆とでもいいましょうか。このような人間に、イエス様はどのように対応されるのでしょうか？

イエス様は十字架の道行きを示すことで対応されました。二人の兄弟に向かってこう言われました。「あなたがたは、じぶんが何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」イエス様が「飲もうとしている杯」とは何を意味しているのでしょうか。そうです、十字架に架けられるということです。この二人には十字架という未来が分からなかったのでしょうか。イエスの世直しが成功し、王になった主に真っ先に仕えるようになるなどと、のんきに考えていたのでしょうか。そうでもなさそうです。イエス様は自分が重罪犯として十字架に架けられるとたびたび予告しておられましたし、世直しなどそんなにたやすいことではないと情勢を見れば容易に判断できたはずです。二人は、未来に苦難が待ち受けているだろうということは重々承知の上で覚悟を決めていたのだらうと思われまます。だからこそ彼らは「できます」と答えました。

これに対しイエス様はこう言われました。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左に誰が座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」ここには事を決するのは神だという考えがあります。イエス様が弟子たちに求められたのは、神様の意志に服従し、神様に導かれていく生き方でした。自分で決めるのではない。まして自分で「できる」と考えるはもってのほかなのです。

厄介なのはこの二人だけではありません。他の弟子たちも同じでした。彼らが二人の抜け駆けに腹を立てたということは、それ自体さもしいことに違いありませんが、イエス様はそのことを問題にはされませんでした。イエス様はこう言われました。「仕える人になりなさい。」「僕になりなさい。」これは単に謙遜を勧めているわけではありません。謙虚さを身につければ、このようなさもしい考えを克服できるとおっしゃっているわけではありません。「仕える人」とは給仕する者、ウェイターです。「僕」とは奴隷です。ウェイターは、待ち構えていてお客が来たらその必要を満たす仕事です。自分で好き勝手にフラフラと出歩いていたならその仕事は務まりません。その時が来るまで何もせずに待っていなければならないのです。奴隷も同じです。自分がやりたいことは一切できません。ただ主人の言いなりの生活をしなければなりません。給仕人も奴隷も、自分でものごとを決められないということです。弟子たちが腹を立てたのは、自分たちの決意や行動でことは成ると考えていた

からです。そもそもそういうことは一切ありえないというのがイエス様の教えです。自分で決めるのではない。自分で行うことはできない。ですから主は、『ふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません』と言いなさい（ルカ 17:10）とおっしゃいました。

自分で決めることも成し遂げることもできない。これが私たちの真の姿です。決めていくようでも、成し遂げられるようでも、それは大きな誤り、錯覚でしかないのです。イエス様は、一切誓ってはならないとおっしゃいました。そして「然りを然りとし、否を否としなさい」と命じられました（マタイ 5:37）。ヤコブ書にも、「あれもしよう」「これもしよう」と大きな仕事を成し遂げようとする人々に次のように警告しています。「よく聞きなさい。『今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう』と言う人たち、あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。むしろ、あなたがたは、『主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう』と言うべきです」（ヤコブ 4:13-15）。そして 5 章 12 節では、「できます」「やります」という誓いをせずに、「然りを然りとし、否を否とせよ」と勧告するのです（ヤコブ 5:12）。この「然りを然りとし、否を否とする」というイエス様の言葉は良く知られた教えだったようで、パウロもこのことに言及しています（Ⅱコリ 1:17-19）。

私たちは何もできません。ただ主が導いてくださるなら、その道を歩むことが備えられ、許されるのです。西仙台教会はアブラハムのようなだと思います。アブラハムは年寄りで子どももなく、いわば先のない人、未来のない人でした。けれども彼は、あなたの子孫は砂の数、星の数ようになる、世界平和の礎となるとの約束を信じて、行ったことのない土地へ旅立ったのです。西仙台教会も、皆がだんだん歳を取り、贅沢を切り詰めた年金生活になり、若い人も来ないし、この団地自体が高齢化して、商店が次々になくなり、空き家が増えてきています。こんなところで伝道の見込みがあるでしょうか。でも事を成し遂げてくださるのは神様です。私たちはなすべきことを力いっぱいしていればよい。伝道ができるなんて少しも考えてはいけないのだなあと思います。

人生も同じです。あと何年生きられるでしょうか。この 10 年はあつという間でした。それを考えれば、この命が尽きるのもあつという間でしょう。これ以上何かしてもものにならない。そう考えるのが人情です。でも、私たちの人生は、できることがあるからやるものではありません。できないけれどもやる。見込みがないけれどもやる。そこに働いてくださるのは神様、成し遂げてくださるのは神様なのです。パウロは植え、アポロは水を注いだ、しかし成し遂げてくださるのは神である（Ⅰコリ 3:6）。主は十字架ですべてを成し遂げてくださいました。十字架の勝利、私たちにはこれがあるのです。これがすべてです。成し遂げてくださるのは神様です。給仕、ウェイターとして、ふつつかな僕として、なすべきことを、心を込めてなそうではありませんか。